

## 年間第 33 主日 マタイ 25 : 14~30 タラントンのたとえ話

大学生の時、通っていた入門講座で、今読まれた「タラントン」のたとえ話を知りました。「タラントン」は英語の「タレント（才能）」のもとになる言葉だと教わりました。講座に参加している人が皆、立派に見えていたので「タレントが少ない自分はどうしたらいいのか？」と感じました。また、「自分が持っているわずかなタレントが取り上げられて他の人に行ってしまう」という展開に怖れを感じました。立派な人はどんどん立派になって、自分はどんどんみじめになっていくように感じました。イエズス会に入ってから同じ印象を持っていました。

理解を変えたのは東日本大震災のボランティアです。宮城県の塩釜市にボランティアに行った時、リーダーの蒲池さんから大切なことを教えてもらいました。蒲池さんは、全国から集まる老若男女のボランティアさんを適材適所に配置していました。疲れていても、一番早く起きて、駐車場の草取りをされてました。私は、被災の深刻さに打ちひしがれていました。片付けても一向に変わらない状況に無力さを感じました。「神様の救いがあるのか？」ミサをしてもあまり意味がないように思っていました。ボランティアさんが引き上げた後、一緒に片づけをしていたら蒲池さんからこう言われました。「神父さんに言うのもなんですが、百の説法よりも捨てる努力が大事ですよ。」この言葉はわたしにとっても新鮮に響きました。自分は、取り立てて勉強もできないし、人に語ることも上手じゃない。でも、もともと体育会だったし、捨てる努力、つまり汗をかくことならできる。それをしていけばいい、と諭されたように感じました。もっともらしく「それでも神様は、見捨てない」と語るより、一日に2~3リットル、黙々と汗をかくことに充実感を感じるようになりました。ボランティアから帰ってきて、被災地支援バザーのために4日間かけてカブトムシを探すことにも喜びが感じられました。わたしのタレントは、汗をかけること。小さなタレントだけど、これを大事にしていこう、と思うようになりました。

2011年の山口教会と天使幼稚園のバザーの収益は、福島県二本松市の幼稚園に送られました。その年、福島第1原発から約50キロ離れた福島県二本松市に行ってきました。園児さんも先生たちも、歓迎してくれました。休みを取って、二本松市内を案内してくれた、幼稚園の保護者会長の渡辺さんはこのように言われてました。「お金をポンと出せる人はいる。でも、汗をかける人は少ない。わたしは、教会・幼稚園と同じことが自分たちに果たしてできるだろうか？と疑問に思うことがあります。二本松市には、原発から近い浪江町から避難して来た人が大勢いましたが、「何か困ってませんか？」と声をかけられませんでした。心にはあっても、なかなか言い出せませんでした。でも、山口の人たちはそれをしてくれました。「えらいなあ」と感心します。」

わたしたちが、タレントを活かすというのは、このことを言うのだと思います。“持つてる才能”云々じゃなくて、困っている人のために尽くすこと。これが聖書で言われているタレントを活かすことだと思います。 また、渡辺さんの言葉は、「忠実な良い僕だ。よくやった。」というイエス様からのねぎらいの言葉です。これ以上できないところまで、頑張ったことへのねぎらいの言葉です。

いただいているタレントは活かせば、お金やモノを差し出す以上に、人に勇気や力を与えます。わたしたちが、いただいているタレントを活かし切れるように願いましょう。そしてイエス様から「よくやった」とねぎらいの言葉を聞きましょう。